

クンケル文庫について

西村, 重雄
福岡工業大学教授, 九州大学名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/11011>

出版情報 : 貴重文物講習会. 10, 2008-07-25. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 39, No. 3 (2004)

【目 次】

大学図書館の魅力.....	41
九大が所蔵する記録資料の状態と活用(6)「坤輿全図」.....	44
You - 大学図書館で何を?どう使う? - 新入生のための図書館ガイダンス - ...	46
附属図書館の開館スケジュールについて.....	48
附属図書館ホームページから情報検索!!.....	51
「法人化をパネに風を西から」	
九州地区国立大学パネルディスカッションを開催.....	53
中央図書館 IC カード利用実験.....	53
平成16年度開学記念行事 第45回附属図書館貴重文物展示	
シーボルトが観た日本.....	54
人事異動.....	54
図書館日誌.....	54
自著紹介.....	56
本学関係者著作寄贈図書.....	57
新図書館だより 第5回.....	58

大学図書館の魅力

西村重雄

1. 図書館の司書の方々が、日本の古刊本や写本の研究会をしておられるのを聞いて、「西欧の古い本についても、同様の勉強会があれば、私も喜んで参加したい」というような気持ちを申し上げたのが機縁で、ラテン語古刊本の書誌作成の研修会が発足して、すでに十年を超えた。2001年には、『タイトルページを読む楽しみ』という100頁を超えるユニークな小冊子を発行し、全国の図書館でラテン語古刊本の整理に泣く方々の「救いの綱」となっているようである。図書館の広報担当の方は、そんな先生なら、気の効いた文章の1つぐらいは書けそうだからとでも間違われたようで小生に依頼が舞込んだが、

元来法学部の無粋な文章の中で何十年も埋って生活してきたものが、一夜にして変身できるものではないのは、誰の目にも明らかであろう。

2. 昨年末以来、珍らしく堅い本が世間の高い評価を得て、いくつもの出版賞を獲得し、現在も増刷が続いているという。著者は、「昔の学生」(私達の時代)にとっては、懐かしく耳にひびく山本義隆氏であり、『磁力と重力の発見 1、2、3 (みすず書房)』というタイトルである。ある賞の選考委員の評に「・・・関係のラテン語文献にも当たっていること」という一項目があったと新聞が伝えている。

ニュートンの時代を扱うとすれば、不可避のことと思われるが、従来は（あるいは今もまだまだ）西欧の文化を伝えてきたラテン語文献まで手を伸ばして根本から考え直すことは、それほど当然のことではない。従って、山本氏の労作評価の一つの重要点として挙げられることとなったものと思われる。

3. 大学図書館の機能は、研究図書館と学習図書館の2つの役割に大別される。自然科学の分野では実験が研究の源であるように、文科系は図書が研究の糧である。ある学者によって新しい見解が打ち出されたとき、それぞれの論拠となっている資料・見解に遡りその当否を検討することとなるが、それは大部分が刊行図書として遺されているものであるから、当然、足は図書館に向う。自分の限られた専門分野に限らないのは当然で、また、思わぬ分野の参照が要求される。ここでも、伝統のある大学図書館の地力が発揮される。すなわち、各学部の講座担当者それぞれが競って何代にもわたって購入に心血を尽くし選びぬかれた図書の集積が、何百万冊という形で維持されているのである。碩学の個人蔵書にかねて関心を持ち続けているが、東西を問わずその運命は極めて厳しい。保存する場所の確保も難問の1つであるが、まずは立派な研究者でなければ、良い書籍は購入できぬ。しかし、思いのままに購入できる資金のある学者は少ない上に、多くは一代限りで、その没後、折角の蔵書が雲散する運命である。人間一生で集められるものはいくら恵まれたとしても精々数万冊のオーダーである。しかも、おのづと分野は限られてしまう。

その点、大学図書館は、各講座担当者の在任中の勉強ぶりを正確に伝える形で保存しており、次世代の研究者が公平に評価する。欲をいえば（欧米の大学図書館の殆どでやっているように）、図書館自体が潤沢な予算を持ち学識の高い司書にふさわしい待遇をもって処し、各研究者の現在の直接関心の対象にはなっていないが、50年、100年の将来にわたり重要な書物を買うことであろう。文科系では、図書さえあれば研究を自分の頭で深めることが可能であるのが原則である。コピー機の発達で、図書利用の独占は破れ、「民主的」研究環境になっているのは

大変良いことで、若い人々に対し自慢に値するであろう。

新しい見解が、図書の中での幾世紀にもわたる先人との対話ではじめて展開されるということは、マルクスの大英図書館での仕事の例をあらためて持ち出すまでもないであろう。時計台と並んで図書館が、大学のシンボルとされてきたのはまことに理由のあることなのである。図書館抜きには大学という知的な営みは殆んどありえないように思われる。

4. 学習図書館としての大学図書館についての評価は厳しいものがある。何年か前、文部省の「高官」が、「大学図書館は古本の倉庫ですよ」と国立大学学長方に繰返して言うておられると仄聞し、耳を疑ったが、果たして間もなく（名称の変更はあったが、明治初年文部省創設以来由緒ある）「図書館課」が消滅し、わずかに研究機関課の一係に格下げとなった。

ここに至るまでについては、国立大学全体の管理体制のあり方に対する真剣な反省が（時期はすでに遅すぎるかもしれないが）必要であろう。学生紛争に対して適切な措置を採りえなかったのと全く同様に、図書館の運営についても、専門職の識見を尊重せず、また財政的措置もないまま放置し続けた結果である。また、大学紛争後、国立大学の他の管理事務部門に倣った、図書館管理職の頻繁な転任も方針の継続性に不利であり、これが教官の協力の意欲を削いだことも率直に認めねばならない。

図書館を天職とされる方々は一般に物静かな方々が多く、その主張をあまり押し通されないこともその背景として考えられよう。

5. 例えば、25年以上も前から盛んに強調されている「指定図書制度」なども、実のところ、私もその趣旨が理解できなかった1人である。しかし、偶々、英語による短期留学受入プログラムを九州大学が他の国立大学に率先して実施することとなり、その運営の過程で、米国の学生を受入れ、また実地に見学し米国の「授業」3単位は、我々の「講義」と全く異なり、教師と受講生の共通の素材文献を基礎とする真剣な討論、60分の週3回（半年15週）と思ひ知

らされたのである。そのモデルならば、なるほど、詳細なシラバスを予め公表し1科目当り何十タイトルの同じ書籍を、受講生に必ず分だけ日夜開館の図書館に備えておく必要がある訳である。少なくとも、我々大学の現場には、文部省情報図書館課の見識が大学課よりずっと先に到達していたのであるが、とてもそこに思いが至らなかった。図書館の方々は持前の謙虚さで、「先生も学生も抜本的に変わらないといけない時期です。図書館はそのほんの一部のお手伝いをしているだけです。」と言われていたのだとやっと今になって知るのである。

6. ひょっとすると、当時の過激派諸君が大学のシンボルとして時計台ではなく、図書館を「主戦場」として選んでいてくれたら、大学図書館の歴史は変わったかもしれず、(自然科学系の先生方が殆どである) 国立大学学長先生方も、おそらく、「大学図書館 = 古本倉庫」説に強力に反論して頂けたことになっていたかもしれぬ、とまで考えたくなるほどである。

7. 本を相手の文系の研究者は、おそらく、図書館職員と多くは共通の性格を持つのであろう。世の中の動きはともかく、静かに本を読み、自分の研究を進めたいと熱烈に考える。そのものにとっては倉庫であろうがなかろうが、数百万冊の図書は魅力のかたまりである。実際、九州大学には、良くもこんな本を所蔵してくれていたと感心する書籍と出会うことが幾度もある。残念なのは、その量に比べ時間があまりに少なすぎることである。

附属図書館に森洋教授の御尽力によるフランス古文書学の大家ペラ教授の遺文庫購入が実現した。ついで、ローマ法学の碩学クンケル教授(ミュンヘン大学)の遺文庫を購入していただき、660頁の大冊の行き届いたカタログが出来上がって暫くのところである。「かねて、こうした地道な作業に丸善とか紀伊國屋書店とかが、目録作成賞を設け顕彰したらと考えている。」と洩したところ、すぐに、「一人でも多くの方がこのカタログで文庫を使って頂くことこそが私達は嬉しいので、賞なんかしょうもない。」という反論に会ってしまった。

おそらく、本が好きで図書館に生涯をかけているこのような職員の方々と、「倉庫」の中から宝を探り、見出し、研究を発展させていく頼もしい次の世代が育っている以上、山本義隆氏と文部省高官それぞれの見識についての世評とは関係なく、大学図書館は魅力ある生命をもち続けるであろう。

8. 最後に、我々のラテン語古刊本書誌研究会の副産物としてのひとつの発見をお伝えしたい。

江戸時代のほんとうの末頃(1867年) 長崎においてJ.M.J. という宣教師によって作成されたと考えられる「日本語 - ラテン語(和羅)辞書」の手稿「Vocabularium Iaponense-Latinum / J.M.J. [請求記号 626/P/3]」が附属図書館に所蔵されていたことが分かった。その入手経緯は未詳であるが、こういうものがあるのが古い大学の良さである。長崎方言の研究資料としても、また、長崎奉行所の言葉遣いの決め手になるかも知れない。長崎出身の方で、ラテン語も勉強したいとお考えの方にはぴったりの資料のように思われる。

(にしむら しげお 法学研究院教授 ローマ法専攻)



Chichiwō — Leo, onis, ~~ma~~ (m.)
Chichinowari, nou, uotta — Ortaus
dedinaw, no, sic, situm (m).
Mori, y idr, etum sum, (d.).
Chichō — Mori et vita.

(最上段: chichiwō = 獅子王(ししおう) - Leo 男性名詞)